

意志と解釈的循環

—ヨーロッパ精神の危機と 存在論生成の連関をめぐる試論

宗近真一郎 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

ヨーロッパ的自意識

1919年、ポール・ヴァレリーがふたつの手紙と付記によって成る『精神の危機』を書いたとき、その精神espritという言葉は、呼気、精霊から悟性にいたるまで多義的だが、その多義性は、ヨーロッパの精神と限定的に述べられることによって、そもそも、精神はヨーロッパにしか存在しなかったというヴァレリーの確信と符合した筈である。第一次大戦の戦慄と惨禍を経て、思弁的中枢において自分が誰かわからなくなり、自分が異形のものとなり、意識が失われる。その限界的な局面で、精神がヨーロッパのものであることを断言しえるか。ヴァレリーの危機感は、『精神の危機』をヨーロッパの危機を描くための媒介とすることによって、ヨーロッパを精神の砦として絶対化したのである。

第一の手紙は「我々の文明なるものは、今や、すべて滅びる運命にあることを知っている」という一行で始まり、巨船の幻影のような古代文明の偶発的な滅びを詠嘆的に回顧しながら、ドイツの知力が破壊を招いた第一次大戦の記憶に繋げてゆく。第一次大戦を、近代主義の特徴である精神的無秩序が限界に達した現象と考えたヴァレリーは、その惑乱を慰謝するように、過去の文明的亡霊を鳥瞰するヨーロッパのハムレットに「——さらば亡霊たちよ！世界はもはや汝らを必要とはしない。私をも必要としない。精密を求める自らの宿命的な運動に進歩という名をつけた世界は、死の利点を生の効用に結び付けようとしている。(中略)我々は、一つの動物社会、完璧にして決定的な蟻塚のような社会が奇跡的に到来するのを目の当たりにするだろう」と語らせる。

第二の手紙では大戦後の緊迫において長い間ヨーロッパにとって優勢にはたっていたバラ

ンスがヨーロッパ自ら招いた結果として揺らぎ始めた事態、知的なものの精神的なものが「交換価値」になり下がったことによって、世界のリージョンの等級が物質的統計的な要素に還元され、ヨーロッパ精神が相対化されることへの不安が開示される。続く付記は「精神の危機」の半分を占める。ヨーロッパの不安をめぐって「人間は不断に、かつ、必然的に、存在しないものを念頭に浮かべて、存在するものと対立する存在だということである」、「精神は過去を現在に、未来を過去に、可能態を現実態に、イメージを事実に対置する。(中略)構築するものであると同時に破壊するものである」といった世界の両義性を強調するエピグラムを配したヴァレリーは、これら両義性を夢の強度によって乗り越えたヨーロッパが古い大陸の岬あるいはアジアの西の突起物でありながら、民族の相互浸透、商品の交換、神々の輩出を揺籃し、ついにナポレオンを胎養した歴史を見渡す。知的工場、巨大都市としてのヨーロッパは自然と人間の多様性の結合であり、さらに、非在のヨーロッパの完成態からの疎隔感に言及して、ローマの法秩序、キリスト教の主観的道德、人間は人間にとって最良の参照体系だとするギリシャ精神を繰りこむことによって、終にはヨーロッパ精神が勝利することを断言する。それは、地勢ではなく、意志と欲望による勝利だという。

いうまでもなく、ヴァレリーは象徴主義でも最強の詩人の一人だが、この論文では経済や科学精神の進捗を尊重し、それらに細かく言及している。芸術はどこにもあるが、真の科学はヨーロッパにしかないと言いきってさえる。詩神を振り切っても、ヨーロッパを精神において防御するというスタンスには不安の表情があらわである。

その直後の1923年には、ハイデガーが『存在

と時間』の初期草稿にあたる「ナトルプ報告」を提出している。「ナトルプ報告」がそうであるように、1927年に上巻として刊行された『存在と時間』では、アリストテレス読解を端緒とする西洋哲学全体の読み直しが構想された。アリストテレスやカントの世界認識のコンテクスト（相互関係）主義に対して、ハイデガーは、世界内存在を定立する志向性そのものの現象をコンテクストから離れたかたちで考えた。デカルトが最後に辿りつき、辿りついたまま放置したコギト（われ思うゆえにわれ在り）の「われ」を構成する「人間」の代わりにハイデガーは「現存在」を置き、主観－客観の二元論を志向性によってドライブされる存在への問いの一元性へと「脱構築」した。その一元性の契機は、コンテクストが失われるひとときに現れる不安であり、不安の経験によってむき出しの有限性となった人間は現存在に追い込まれる。

『存在と時間』のエッセンスを後年に敷衍展開した講義録『形而上学入門』では、「なぜ一体、存在者があるのか、そして、むしろ、無があるのではないか？」と繰り返し問われるが、問うという運動性と存在への意志とは不可分であり、存在を追求することによって、その志向性が根源を措定する事態が現前する。この根源への志向性がドイツ主義と響き合い、ナチズムに呼応した軌跡は明らかである。

だが、ハイデガーのナチ加担は、エシックスにおいて批判される前に、ハイデガー思想の根源論の始まりにある地勢感覚、すなわち「ヨーロッパはロシアとアメリカとにはさまれて万力の中にあり、この両者は形而上学的に、つまり両者の世界性格と精神への関係との二つの点で同じであるとわれわれは言った。精神の無力化が自己自身に由来しており、——以前のものによって準備せられたとはいえ——結局は19世紀の前半における自己自身の精神状況から規定されているとすれば、ヨーロッパの状況はますます不吉である」という状況感覚をピックアップしながら辿られてもいい。ハイデガーは、ドイツ観念論の崩壊という事態の背景について、19世紀前半という時代は根源性にかかわる言説をサポートする強度を維持できなかったとヨーロッパ精神の喪失を振り返って見せたが、この喪失のバイアスは20世紀以降、一気に加速したの

である。

20世紀に入って、極東の日本が清国に続いてロシアを破り、世界史の前面に現れた。アメリカは南北戦争（1861～66年）の総力的内戦を経て、国家としてのトータリティを確立して全ヨーロッパに拮抗する覇権を得ており、フランスやイギリスには膨大な債権を有した。ヨーロッパは列強国家とロシア、日本は重層的な連合や協商を締結していたが、1914年のサラエボ事件を機に二つの陣営に分かれて、ヨーロッパを主戦場とする世界大戦が勃発した。この世界戦争では機関銃、毒ガスや鉄道といった近代テクノロジーが勝敗を決したともいわれる。一方で、近代テクノロジーが導入されながらも戦力の主体は歩兵で、西部戦線の塹壕戦では数百万人の若者が駆り出され、戦死者は900万人に達した。戦時統制経済で同盟国の生活環境は隅々まで疲弊。1918年のドイツ皇帝退位による終戦の前年にはボルシェビキによるロシア革命が派生した。

このように第一次世界大戦では、戦線において近代と前近代が交錯し、かつ、ヨーロッパが戦場となることによって、それまで世界の中心を占めていたはずのヨーロッパは、自らの地勢、自らの共同的な歴史的蓄積の優位性が相対化されることになる。それは、勝利した連合国、敗北した同盟国において同様の不安を励起した。

ヨーロッパは、大陸の岬であり、何時でも世界の辺境になりうる。このオブセッションがヴァレリーに精神とは巨大都市ヨーロッパの精神以外ではないと断言させたのである。数年ずれるが、ハイデガーは、ヨーロッパの地勢的不安を追及して現存在、有限性の不安を析出したといってみたい。因みに、『存在と時間』が刊行された前年1926年にヒットラーの『わが闘争』が上梓されている。ヨーロッパの精神、精神そのものであるべきヨーロッパの揺らぎは、その発生において危機的な現存（いま・ここ）を貫かれていたのである。

根源の再発見

近代批判哲学のマイルストーンと呼びうるカントの定言命法は「汝の意志の格律が、つねに同時に普遍法則となるように行為せよ」によっ

て始まる。この命法には、理性、道徳、自由の課題が凝縮されている。また、この命法が通用されるべき場所、それによって到達されるべき場所は、西欧近代社会（国家）であり、のちにヘーゲルが人倫と呼んだ共同体である。一方、カントは定言命法の根拠は普遍性が到達されて根源的価値を有するものの中にだけ存在するという。命法の実践とは、その根拠を内在的に志向することと等しいから、カントの命法のままでは、普遍性を追求する（未到達な段階にある）限り、その根拠を志向することは不可能だということになる。

そこで、カントは、普遍性の認識についてア・プリオリというサポート概念を措定した。すなわち、普遍認識は、予め統覚されうるものである。だが、それは生得的な統覚ではなく、自然法を遵守する人間として根源的に統覚されるとカントは述べた。その根源的な統覚は、キリスト教の摂理から解かれた人間の直観に訪れるものである。根源性は神の場所から人間の場所へとシフトした。それは、根源性が、神（永遠性）から有限な人間にシフトされることによって、人間が根源を志向する存在になるということである。根源性の普遍認識に向かって、ア・プリオリから主体的に関与する存在としての人間が定立された。

ハイデガーは、カントから根源的な統覚への主体性を引き継いだ。だが、ア・プリオリの孕むコンテクスト主義（認知される対象性やものごとの機序）を否定して、完全に無前提な位置から根源性にアプローチしようとした。コギトもア・プリオリも払拭したむきだしの存在に到達しようとしたのである。根源性に向かう主体を「人間」ではなく「存在者」として措定し、「存在者」は何かについての志向性において存在することによってあらゆるコンテクストから自由であることを探究した。前項で触れたように、カントの定言命法における人間の主体性は、存在者の志向性へと「脱構築」されたのである。後述するようにハイデガーの根源性はデリダに批判されるが、「脱構築」という還元的アクションはデリダに対してハイデガーが先行的に実践したということが出来る。

ハイデガーの存在論のアプローチがフッサールの現象学に依拠していることはよく知られて

いる。依拠というよりもハイデガーとフッサールとはひと世代の年齢差はありながら暫くは並走したとっていい。フッサール現象学のポイントは三つあると考えられる。ひとつは、認識行動をあくまでも意識の志向性に求めていることである。「認識は本質的に対象の認識である。しかもこれは認識自身の内在的意味によることであり、認識はこの内在的意味によって対象に関係するのである」。すなわち、意識は恒常的な志向構造によってのみ「そのように規定されて存在する客観が意識の中で意識され、そのような意味として現れる」現象を了解しうる。

この事象そのものに立ち帰り、問い明かす志向性が超越的—現象学的還元—to到達するには、これが二つ目のポイントになるが、普遍的な判断中止（エポケー）という方法的操作によって一度は世界を失わなければならない。すなわち、「括弧入れの方法」によって虚空に浮かぶ純粹直観と自己省察を超越性として保存し、そこへ回帰するのである。三つ目は、フッサールが、世界体験の構成は、個人的経験ではなく、共同体的経験のことであり、世界それ自身は、われわれすべてが原理的にそこへ到達しうる「同一の世界」であると考えたことだ。「同一の世界」に向かう超越論的相互主観性の志向の対象性は身体である。「身体とは、心的存在、心的生活がその中で自己を〈表現する〉事物のことである。私は身体を知覚することによって、その表現をも経験するのであり、そしてさらにその表現を通して〈自己を表現しているもの〉ないしは〈共存の現在という仕方では自己を告知しているもの〉としての他者の心的生活をも経験するのである」とフッサールは述べた。

ハイデガーはフッサールと並走しながら、フッサールが厳密学としてジャコメッティの彫像のように削りに削った理念を肉感的に展開したということができる。フッサールの超越性論は、その厳密性ゆえにトートロジーを呼び込み、まさにエポケー（判断中止）が派生し、それを「超越性」が支えるような循環論的な構造になっている。この循環論に至ると「超越性」の在り処が一気に見えなくなってしまうが、ハイデガーは、死に向かう現存在の情緒性を前面に押し出し、志向性構造のドラマツルギーに存在論記述の的を絞った。

『形而上学入門』でハイデガーは、「なぜ一体、存在者があるのか、そして、むしろ無があるのではないか？」と根源的に問うことは知ること、志すことであり、自己の中において自己を展開することであり、現存在が一つの意志の中に置かれることによって隠蔽されていたものから自己が連れ出され、光の一中に一立つと語る。人間は問うことで、歴史的な自己自身へと至る。その自己性において、人間は、人間に対して自らを開示する存在を歴史へと変身させ、人間自身として立つ。人間の存在は、語の厳密な意味において「現－存在」であり、存在開示の場所としての現－存在の本質性において、存在開示のための視線が根源的に根拠づけられているのでなければならない。問うことによって、隠蔽されていた「無気味なもの」がむき出し（非隠蔽性）になる。人間存在とは、「無気味なもの」を存在者の存在性を賭して集約し、知性によって現象を作品へと布置し、むき出しになった事態をそのまま保存する。非隠蔽性は根源的な反復によってのみ保存されうる。

あらゆるコンテクストを払拭してハイデガーが断言した根源性とは存在者について問うことへの志向性である。さらにいえば、「無気味なもの」がむき出しになるまで問うことをしかるべき瞬間と忍耐によって持続する意志である。

この根源性には特記すべきふたつの面がある。ひとつは、カント的な定言命法の「根拠」が画定されるための補助線として措定されたア・プリオリを除去してもなお一元的に自立しうる根源であり、まさに根源はハイデガーによって断言され、再び見出されたのである。ふたつには、根源性を構成するものが道徳でも、理性でも、自由でもなく、問うことへの意志（志向性）に還元されたということである。『形而上学入門』でハイデガーは、存在者について問うことは、精神覚醒の根本条件であり、歴史的現存在の根源的な世界のための、また西洋の中心であるドイツ民族の歴史的使命を引き受ける本質的な根本条件であると語っている。これが、ナチズム加担のエビデンスにもなったことは周知だが、ハイデガーがドイツ観念論の破綻を意志論によってリカバーしようとしたモチーフは、第一次大戦後のヨーロッパの惑乱、莫大な戦争賠償を背負ったドイツの窮地からの回生へ

の覚悟と不可分であると考えられる。

意志と解釈

根源性は根源的であることにおいて自明でなければならない。また、認識が対象への認識であるという志向構造を措定しなければ世界は定立されない。フッサールはエポケーによって世界定立にかかわる本質直観を堰きとめ、ハイデガーは存在者を問うという非隠蔽的な腕力によって根源性を把持したように思える。それらは、彼ら独自のモチーフに貫かれるとともに、根源性がなんとかして再発見されねばならないという、ヨーロッパにおけるベルサイユ体制下のオブセッションと不可分だった。それらは単なる価値観ではなく運動そのものであった筈だが、それでも、根源はヴァレリーのいう精神と平衡的な関係においてのみ自明だった。自明性、すなわち究極の根拠はその究極性（無根拠性）ゆえに、エポケーあるいは存在を問う志向性へと円環した。

ジャック・デリダは、この円環について、自明性を前提としなければどんな哲学もありえないのか、自明性はどんな論理に対して超越的であることによって論理の外部にあるが、その外部性は論理性によって対応されることがないのか、論理の外部にあることによって自明であるものが消失しても自明性を断言できるのか、と問いかけ、ハイデガーの存在者は無前提に存在者ではありえないと述べた。存在者を存在者たらしめる根源とは、ただ偶発的にそう語られるしかないものだ。ハイデガーは存在者の根源性が固有なのであるといい、根源は存在者が回帰すべき故郷であるというロマンを語ったが、デリダはそのロマンを誰も解明しえない差異の記録（痕跡）に過ぎないと批判した。

「エクリチュール、根源への情熱、これはまた主語の属格という方向から理解されるべきである。書かれることで情熱的になり、受身で、過ぎ去ってしまうのは根源である。書かれるということは言わば記録されるということである。根源を記録すること、それはおそらく根源が書かれることであり、しかしまたそれは、根源が或る体系のひとつの場所と機能にすぎないような、そんな体系の中に記録されることであ

る」。記録は差異を反復する。だから、記録されずに終わるもの、省略されるべき前提、偶発的な欠如にこそ回帰すべきテキストの円環が見出されねばならない。

このように自明性の消失がデリダの「脱構築」の契機である。ハイデガーの根源性やフッサールのロゴス中心主義など、自明なるものの全ては「或る体系のひとつの場所」として通過される記録（痕跡）へと相対化された。だが、絶対性に対する単なる相対主義ではない。それらが自明ではないという事態において、テキストはどう読み直されるのかが「脱構築」の実践に他ならない。この実践には背中合わせのような二つの側面があると思われる。一つは意志論への異化作用であり、もうひとつは意志論を解釈によって成立させようとする意志そのものを差異の自己展開として再び解釈するということである。

意志論への異化作用について、デリダは「存在そのものは、思考され、言葉で表わされるしかないのである。存在は〈ロゴス〉と同時のものであるが、〈ロゴス〉自体は、存在の〈ロゴス〉としてしか、存在を語る〈ロゴス〉としてしかありえない」と記す。この「二重の属格性」は、ともすると忘れ去られて、言葉と存在は切り離され、存在と存在者の差異が暗黙の前提になってしまう。言葉による意志の表現には存在の思考が伏在するのである。存在への問いは、問いを励起した意志に符合する言葉をまだ見出していないがゆえに、問いの可能性についての共同的な意志あるいは自明性へと円環する。この円環性をデリダはギリシャ的な「強力な弁明の意志」と呼ぶ。「かくしてもう一つの絶対の根源、もう一つの絶対の決意に関するこの奇妙な確信は、問いの過去を確かめることによって広大無辺の教えを解き放つ。すなわち問いを涵養することを」。

だが、ハイデガーこそがこの円環性を知りぬいていた。「事実などは存在しない、ただ解釈だけが存在する」というニーチェのテーゼを継承したハイデガーは、存在者の自明性（無根拠）を確信することによって、円環性を時間性に読み替え、問いの無限性、解釈への志向性を断言した。ア・プリオリを除去しても、解釈への意志が世界を定立するのである。ニーチェ的には

原初の混沌の中から世界を立ち上がらせるのが解釈であり、「君の行為が、無限の繰り返しとして、いつもそう欲されるべきものになるよう行為せよ」というエピグラムの受肉である。この二つ目の側面に関して、デリダは、昨日死んだ哲学の言葉が投げかける影のうちに、その死の宿命のおかげで思考の未来があるという言い方で、「差異」の契機を確認している。だが、ハイデガーにとって解釈が現存在の志向性の表現であったのに対して、デリダにとっての解釈は、円環性を解き、根源の彼岸、すなわち、超越があり得ないテキストの水平的な自己展開のアクションだった。その意味で、デリダが「脱構築」したのは、ハイデガーの「根源」ではなく、実はその「解釈」だったのだともいえる。

つまり、解釈は意志によって表象されるというよりも、「解釈」という自律的な審級によって無前提な世界が差延の地平に現れる。根源性（自明性、時間性）ゆえに、哲学が解釈的でありうるのではなく、「解釈」によって自明性が解かれうるのである。デリダは、現象学のような形相記述的な論理は、厳密にはなるが、極限化の操作性によって抽象的な瞬間にしか関与できていないので必然的に不正確であり、「非正確」であるという。形相記述がイデアの求心力によって推論に陥るからである。ハイデガーはその「非正確」を、例えば光や故郷といった（ギリシャ＝プラトンの）ロマンによって回収してしまった。「ロゴスは歴史と存在の外では何ものでもありません。なぜならそれは言説であり、無限論理的推論であり、現実的には非無限性だからです。またそれは意味だからです」。

この統一的な世界を目指すロゴスを解体するかたちで、ニーチェ的なテーゼを「解釈」が実践すること。それは、デリダにとって、ギリシャのロゴスにユダヤ的無限性を対置することによって、根源への了解が呼応する対他的偶発性の暴力を鎮める処方だった。「差異」の自己展開によって、ユダヤがそれによって告発され続けて来た「現にあるような世界」の制定者が非歴史的に解消されるのである。ハイデガー批判によって、根源への確信が孕む攻撃性に対して敷かれるべき防御、というよりもハエも殺さないような対抗的攻撃性をデリダはユダヤ性に託

したのである。

ちょっと類型的になるが、カント、ヘーゲルに遡り、マルクス、ハイデガー、フッサールなど（ここに「至高者」に求心したバタイユを加えてもいい）根源を確信する意志論から始まる現象学や存在論が体系的な言説を指向したのに対して、デリダ、ロラン・バルト、ドルーズ、ベンヤミンらからニーチェまで遡る解釈的な言説は、断片やアフォリズムのスタイルを採った。むしろ、ニーチェは批評的な腑分けなどに収まる思想家ではないが、初期の『悲劇の誕生』、『道徳の系譜』などを例外として、解釈の形態はいっかんして非体系的だった。欲望する身体の爬行性が、そのまま解釈となったのである。統合されようとする解釈の意味性をディオニソスは絶えず非意味へと粉碎した。だが、ニーチェのアフォリズム的断片には、意味と非意味の拮抗状態のダイナミズムが保存されているのである。

このダイナミズムから逆算するなら、解釈とはむしろ対象内容に歴史的規定性を呼び込む反動的な装置ではないのかと問いかけたのがスーザン・ソントグである。ソントグは、現代的な理解に相同する解釈行為によって世界は「意味」というフィクションへと委縮すると明言した。ハイデガーが現存在に肉薄すべき意志の媒介として選択した解釈は、ソントグにとっては作品に接近し、それを疎外するための公準である。もともとそこにあった意味（根源）を現前させることは、ハイデガー的には解釈の本旨であるに違いないが、ソントグは、世界そのものが解釈によって感覚出来なくなり見えなくなる、という。

あげく、ソントグは「解釈学の代わりに、われわれは芸術のための官能美学を必要としている」というマニフェストを述べるが、ここで転倒されているのは解釈だけではない。意味も意志も根源性もなにもかもが転倒されると考えるべきである。その転倒は、実は、ハイデガーが根源性への記述的意志を存在の解釈学と呼んだときに始まっていた。存在の自明性が危機に瀕していることからこそ、ギリシャ＝プラトンのロゴスが選択されたことにデリダは抵抗したが、ソントグは、根源性の空虚を断言してしまった。ハイデガーが、解釈（了解）によって、

有限な現存在は歴史的（意味的）になりうると考え、デリダはそれを「或る体系のひとつの場所」に過ぎないと批判したが、ソントグは、さらに、歴史（意味作用）に対して「官能美学」が、芸術作品においては内容という亡霊に対して様式の沈黙こそが優位であると言いきったのである。

ハイデガーに長らく師事していたH-Gガダマーは、テキストとその解釈者とは相互に内在する自明性を水平的に融合して一体的に循環すると述べた。その主著『真理と方法』は1960年、ソントグの『反解釈』が1966年、デリダの『エクリチュールと差異』は1967年に刊行された。この時期に、自明性（根源性）と解釈との相関が消滅し、さらに、解釈そのものも孤立に追い込まれたが、それは、ヨーロッパ性をリプレゼンしていた意志論に無限性を表象するユダヤ性が復元的に拮抗するシークエンスと不可分である。

すなわち、大ドイツ主義の偶発的・歴史的暴力に完膚なきまでに打ちのめされたユダヤ性が伏せていた体躯を起こしたひとときだったのだ。その意味で、デリダが、ひとつの世界の深い切断についての欺瞞を指弾した次の一節に伏在する揺らぎは見逃されてはならない。「われわれは〈ユダヤ人〉であろうか？それとも〈ギリシャ人〉であろうか？われわれは〈ユダヤ人〉と〈ギリシャ人〉の差異のなかに生きている。この差異こそがおそらく、歴史と呼ばれるものの統一的根源なのであろう。われわれは差異のなかに、差異によって生きている」

【引用・参照テキスト】

ポール・ヴァレリー『精神の危機』（恒川邦夫訳、岩波文庫、2010年）

マルティン・ハイデガー『形而上学入門』（川原栄峰訳、平凡社ライブラリー、1994年）

マイケル・サンデル『これから「正義」の話をしよう』（鬼澤忍訳、早川書房、2010年）

エトムント・フッサール『フッサール・セレクション』（立松弘孝訳、平凡社ライブラリー、2009年）

ジャック・デリダ『エクリチュールと差異』（桑名毅他訳、法政大学出版局、1977年）

スーザン・ソントグ『反解釈』（高橋康也他訳、ちくま学芸文庫、1996年）